

2023 年度 第 23 回女子美制作・研究奨励賞 達成・進捗報告書

小田中 めぐみ

小田中 めぐみ(Odanaka Megumi)

●経歴

2015 年 女子美術大学大学院 美術研究科 美術専攻修士課程 日本画研究領域 修了
女子美術大学 短期大学部 美術コース研究室 非常勤助手 勤務

2017 年 女子美術大学 短期大学部 美術コース研究室 非常勤助手 退職

●略歴

2017 年 二人展『二人展－小田中めぐみ・平澤咲－』（恵比寿「弘重ギャラリー」）
二人展『二人展－小田中めぐみ・平澤咲－』（表参道「表参道画廊」）

2018 年 二人展『二人展－市村多真美・小田中めぐみ－』（銀座「ギャラリー東京 ユマニテ」）
企画展『羅針盤セレクション 2018 VOL.2』（銀座「アートスペース羅針盤」）

2019 年 グループ展『アパートメント』（銀座「月光荘」）

2020 年 個展『第2回新進気鋭作家・選抜展』（大田原「大田原市芸術文化研究所」）
グループ展『アパートメント vol.2』（銀座「アートスペース羅針盤」）

2021 年 選抜展『みんなの未来展 vol.7』（杉並「女子美術大学附属エントランスギャラリー」）
企画展『第7回ゲタ箱展』（大田原「大田原市芸術文化研究所」）

2022 年 企画展『第8回ゲタ箱展』（大田原「大田原市芸術文化研究所」）
二人展『小田中めぐみ 森山千尋 二人展 FIKA ーフィーカー』（中目黒「hygge arts & crafts gallery」）
企画展『アートスペース羅針盤セレクション6人展』（銀座「アートスペース羅針盤」）

2023 年 企画展『第9回ゲタ箱展』（大田原「大田原市芸術文化研究所」）

2024 年 個展『小田中 めぐみ 個展』（銀座「アートスペース羅針盤」）
企画展『第10回ゲタ箱展』（大田原「大田原市芸術文化研究所」）

●受賞歴

2023 年 100 周年記念大村文子基金 2023 年度第 23 回女子美 制作・研究奨励賞

I. 制作・研究の動機・目的

私の制作は、日常を過ごす中で自分の何気ない変化と共に、積み重ね模様を手で描き続けることで画面上に形跡となり、蓄積されながら変化する過程に重きを置いています。

人が日常で得られるコトには、意識的な部分と無意識な部分があります。その言葉にできない無意識な“何か”も含めて画面上に形跡を残すには、写経のように瞑想しながら抽象表現で描くのが、自身の最もよい制作と考えています。その制作の状態を保つ中で最も厄介なことが絵を描くことへのコンプレックスでした。

私が美大への入学を決めた理由は、絵が描けるからではなく、下手だから美大で学ぶためでした。そもその入学時のスタートラインが他者と違ったことにより自分にできる制作とは何かと根本的に考えたことが、現在の制作スタイルのきっかけとなりました。そんな学びの中で作品に作家の日常が反映された記録的側面もあると感じ、その日常とは自分の平凡な日常ではどうかと考えるようになりました。手探りの中、授業中にノートを記す際に普段通りでも字が書きにくい日があることに気づき、その日の自身の状態が微々たる差でも文字の形に影響しているのではないかと感じました。そこで、平凡な日常を過ごす中で得られるコトも字を模様に置き換えて自分の手で繰り返し描くことで画面上に形跡となって残るのではないかと考えました。そして作品に説得力をもつには短期間では難しいと考え、長い月日と自身のそのときの状態が作品制作に必要なこの制作スタイルを10年以上継続することに決めました。

しかし制作する中で、コンプレックスで意図的に画面に余計な工夫を凝らそうと思考を巡らせる傾向が課題となりました。そこで、自然体で瞑想のように思考を移行しやすくなるよう最初の描き出しを誰でもできる方法で、必ず同じ手順を踏むこと(※)で余計な画面構成をせずに自然と手が動くようにしました。

今でも形跡となっているか思念することもありますが、展示の際に多くの人が日本画特有の美しい絵肌に関心を持つ中、友人が私のある作品を観て不穏的で好きだと伝えてくれました。日常を過ごす中で、プラスの要素だけではなくマイナス的な要素を潜考することも多くあります。不穏というプラスの要素ではなくマイナス的な要素を感じ取ったその言葉から全く同じことではありませんが、作品の形跡を通して私と友人が共有できる日常があったのではないかと考えています。

(※)

II. 制作・研究活動 一個展について

 【展示作品詳細】①新作の◇共通の制作手順についてで具体的な手順を記載します。

Ⅱ. 制作・研究活動 ー個展についてー

【展覧会名】小田中 めぐみ 個展

【場所】アートスペース羅針盤

〒104-0031 東京都中央区京橋 3-5-3 京栄ビル 2F

【期間】2024 年 2 月 12 日(月) ～ 17 日(土) 6 日間

【時間】11:00 ～ 19:00 (最終日は 17:00 まで)

【内容】新作(Scene20240131)を中心に今まで描き続けた作品を展示。これまでの制作活動の集大成とした初の単独個展(※1)

(※1)2020 年に大田原市芸術文化研究所の選抜で、彫刻作家と共にW個展として開催しました。しかし、新型コロナウイルスに伴う緊急事態宣言期間のため HP 上での展示写真の公開のみとなりました。作品を実際に来場して鑑賞できなかったことから、事実上の初の個展となります。

2020 年に作品の評価を得られ個展を開く機会があったものの、新型コロナ禍により HP 上の公開のみとなりました。そのため、今回改めて個展を開催しました。

学生時代に多くの同期が個展を開催する中、私自身は 10 年以上の期間を設けて個展を開くことを当時から決めていました。私はごくありきたりな日常を過ごす中で得られるコトが、自分の手で模様を積み重ね描くことで画面上に形跡となって残ると考えています。そして、制作で大切にしていることは、日常を過ごす自分の何気ない変化と共に同じ画面に描き続けることで形跡が蓄積され、画面が変化する過程に重きを置いています。自己の記録的な側面もある私の作品には、長い月日と自身のそのときの状態が作品制作に必要不可欠な要素でもあります。周りのスピーディーな活動に焦りを感じることもありましたが、説得力を持って作品を発表するため 10 年以上の年月を費やして個展を開くことが最もよい時期だと考え、ようやく 2024 年 2 月に個展を開催しました。

今回の画廊は、学生時代からお世話になっています。しかし、2025 年秋以降(※2)に老朽化により京橋駅周辺の都市開発のためビルの取り壊しが決まっています。そのためここでの個展を決めたのは、取り壊され環境が変化する前に、目標になる多くの先輩方が作品を発表し、これまでの時間の経過によって築いた画廊独特の展示空間の中で自分の集大成の作品を展示したいと考えたからです。今回個展を開催したことで展示空間も含めて作品の記録として残せたと考えています。

(※2)画廊との契約時(2022 年 10 月時点)は 2024 年春以降に取り壊される予定でしたが、現在は 2025 年秋以降に延期となっています。

◇DM について



グループ展や企画展等の DM では完成した作品画像を使用しますが、今回の DM では制作風景の画像を使用しました。窓から朝日が差し込み、画面を照らすと岩絵の具が輝き、盛り上げ胡粉の凹凸が浮き上がってきます。太陽の傾きによって輝きや凹凸の影が変化し、時間の経過を感じながら画面と向き合います。この制作風景は、展示会場では共有することができないため DM に使用しました。

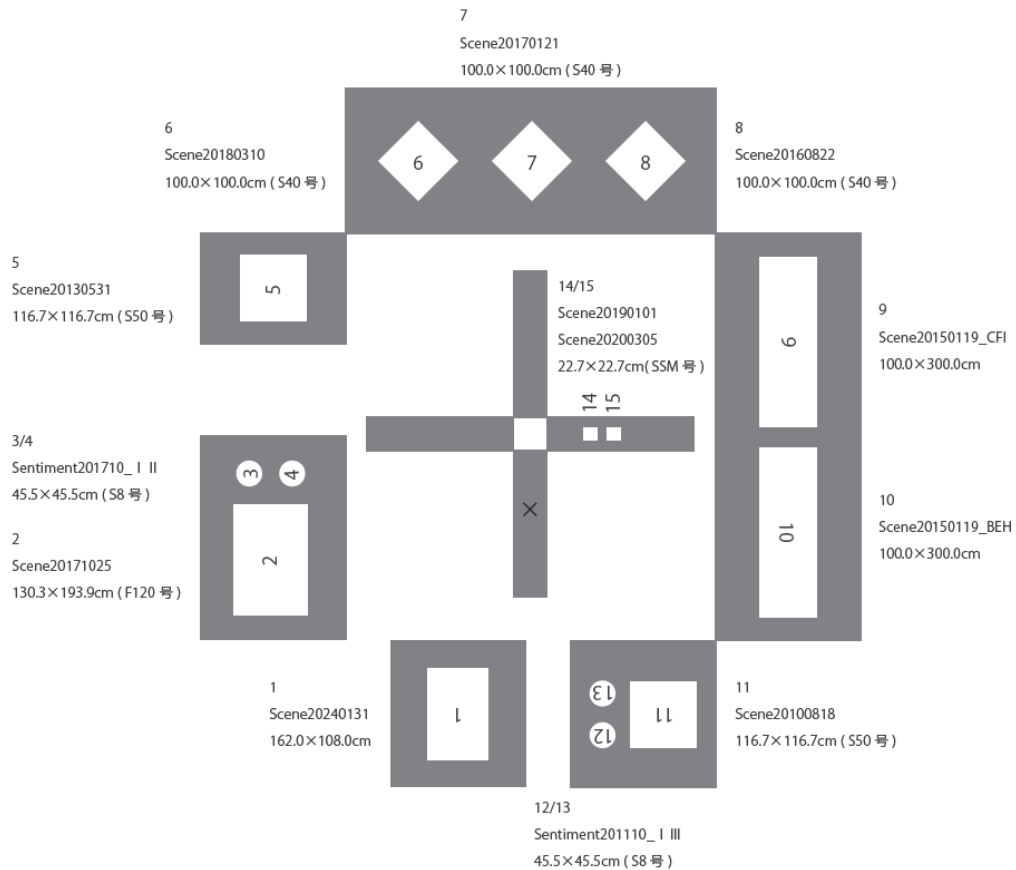
この DM には左下に【2024.10.17 AM8:51:12】と記載しています。DM は送る相手がいることを考えたときに何も説明がないことは一方的で不親切と感じたこと、しかし、制作風景について文章で説明することは私の表現方法として合っていないと感じたことから撮影時刻を記載することにしました。

DM をきっかけにご来場した方も今回の個展では多く、また、在廊中に来場者との会話のコミュニケーションツールともなり、たくさんの方々との交流のきっかけとなりました。

【展示風景】



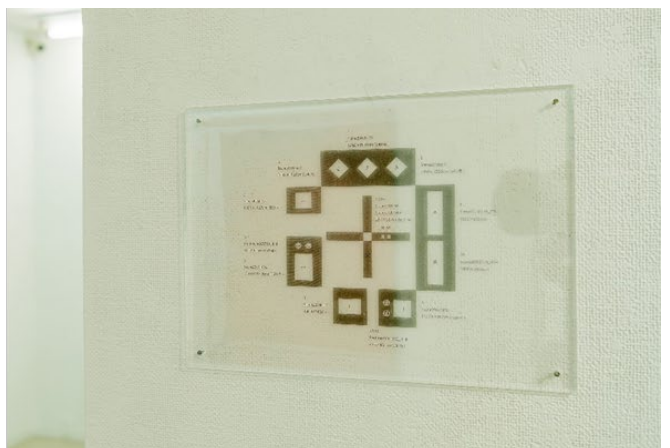
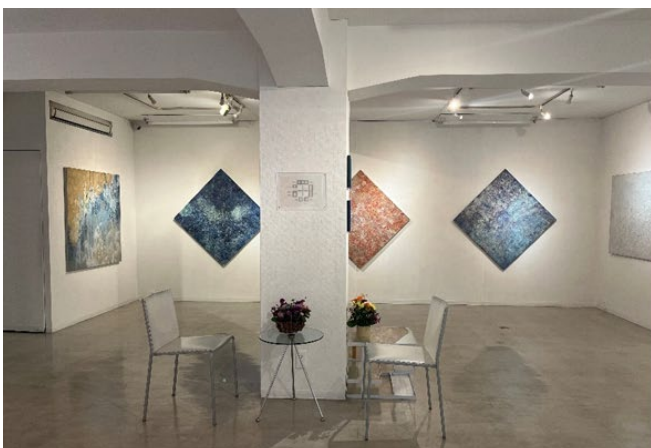
◇作品の配置図およびキャプションについて



画廊の特徴として中央に柱があり、正方形に近い空間のため中心から全体を見渡すことができます。

今回の個展では、1つ1つの作品を鑑賞することよりも作品を比較することで月日の経過とともにその時々で変化をした過程を感じられるように全体を意識しながら作品の並びや天地を考え、画廊全体の空間づくりを大切にしました。そのため、普段は作品ごとにキャプションを付けますが、鑑賞中に1つ1つキャプションを見ることで作品の流れが途切れることを避け、また空間的に作品を鑑賞できるように中央の柱(配置図×の部分)に透明フィルムに印刷した作品の配置図をキャプションとしました。

在廊中に中央の椅子に静かに座りながら丁寧に作品を鑑賞する来場者の後ろ姿が印象的で、とてもゆっくりとした心地よい空間で作品をずっと眺めていられたと感想をいただきました。



【展示作品詳細】①新作



◇Scene20240131(部分)制作過程一部

日々のことを振り返りながら模様を描いては岩絵の具で画面を洗う行為を1年間繰り返しながら画面を構築します。画面は穏やかで心地よい時もあれば、荒々しく心ざわつく時もあり、自身のその時の状況によって一刻一刻と変化します。

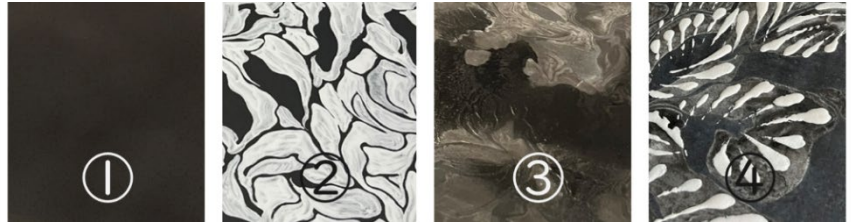


◇共通の制作手順について

制作する際は、最初に共通した手順を踏むことを基本ルールとして自分の中で決めています。

1. 天地を決めない。
2. 最初の描き出しは以下の①～④の作業を行い、画面を模様で埋める。

- ①墨で画面を黒くする。
- ②胡粉で模様を描く。
- ③再度墨をかける。
- ④盛り上げ胡粉で模様を描く。



初期の作品(旧作5・11～13)では1.のみで模様を描いていましたが、その時々自分の状況を大切にしながら描いた形跡を積み重ねる過程を重視するため、意図的な画面構成を行うことは避けて描けるように旧作9・10以降の作品は最初の制作作業に2.を必ず行うようになりました。

この手順のため、在廊中に来場者から特に多く質問を受けた内容が2つあります。

- ①どこから描いているのか。
 - ②凹凸の表現はどうやっているのか。
- ①については、下図などそもそもの画面構成を決める工程がなく天地を決めないことにより、画面の周りをぐるぐる回りながら描く時もあれば、天地を変えて一定方向から描く時もあるため①の質問が多くなったと考えています。
- ②については、盛り上げ胡粉という日本画特有の古典技法を取り入れているため、また作品を展示する際は、照明により凹凸の陰影がはっきりするためより形跡がわかりやすくなることから作品の特徴の一つとなっています。

【展示作品詳細】②旧作(部分)



	9	
	Scene20150119_CFI	
	100.0×300.0 cm	
	紙本着彩	

	10	
	Scene20150119_BEH	
	100.0×300.0 cm	
	紙本着彩	



2

Scene20171025
130.3×194.0 cm
紙本着彩

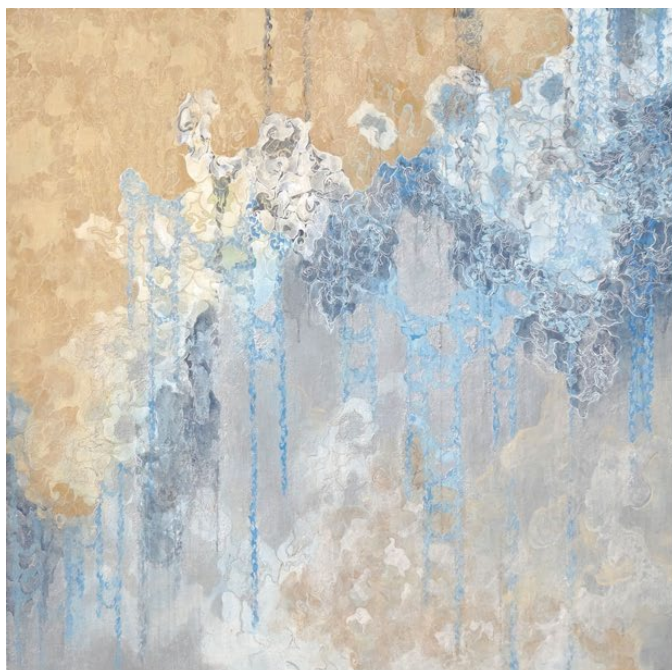
3

Sentiment201710 I
45.5×45.5 cm
紙本着彩

4

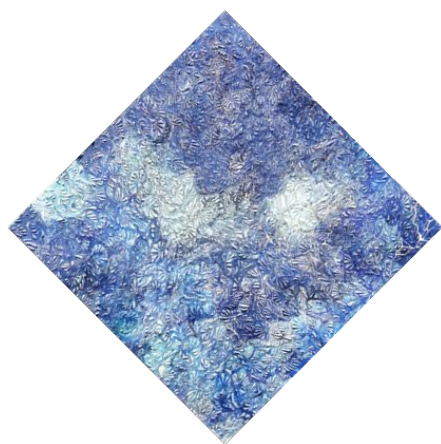
Sentiment201710 II
45.5×45.5 cm
紙本着彩

【展示作品詳細】④旧作



5

Scene20130531
116.7×116.7 cm
麻 岩絵の具



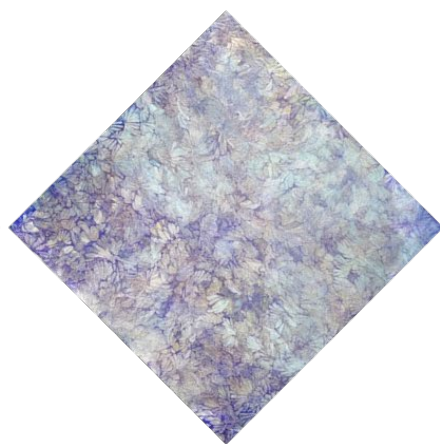
6

Scene20180310
100.0×100.0 cm
紙本着彩



7

Scene20170121
100.0×100.0 cm
紙本着彩



8

Scene20160822
100.0×100.0 cm
紙本着彩



11

Scene20100818
116.7×116.7 cm
紙本着彩



12

Sentiment201110 I
45.5×45.5 cm
紙本着彩

13

Sentiment201110 III
45.5×45.5 cm
紙本着彩



14

Scene20190101
22.7×22.7 cm
紙本着彩



15

Scene20200305
22.7×22.7 cm
紙本着彩



Ⅲ. 結び

賞によりご支援をいただいたことで目標となる日本画の先輩方が展示をした画廊でこれまでの制作活動の集大成とした個展を開催でき、多くの来場者にお越しいただきました。これまでの制作活動に対して明確に他者からの評価を得られたことで今後について自然と考えられるようになりました。受賞前までは、目標をとにかく制作を継続することだけに絞り、仕事と両立しながら自分対作品と小さな視野の中で制作活動を行ってきました。しかし受賞後、制作の継続は自分の努力だけでは難しく、多くの方々の支えがあったからこそ続けられたことだと強く実感しました。そのため、今後は支えがあったことで得られた美術の経験や知識を自分のためだけに活かすのではなく、微力ながらも他者や社会に役立てられるように努力をする時期だと考え、次のステップに向けて取り組んでいます。

現在の制作スタイルも継続しつつ、今までは自分の中からアウトプットする制作がメインとなっていました。再度自分自身に知識等をインプットする必要があると感じています。そのため、ジャンルを問わずに様々な作品を美術館で観たり、画集で調べたりしながらそもそも抽象画とは？と改めて学ぶ時間を多く取るようにしています。そして、つい最近ではデッサンの授業を組み立てる機会がありました。45分程度の授業を組み立てるだけでも、実際に自分自身も静物デッサンを描くことで描き方を模索することに加え、現代アーティストや美術史の芸術家の作品や考え方を調べるなどたくさんの知識を再度勉強し直す必要がありました。人に伝えるためには多岐にわたる正しい知識が必要であると痛感しました。今後新しいことに挑戦するため制作以外にも基本に立ち戻る学びを意識的に取り組んでいます。

さらに現在、新しい挑戦として採取した石や土を粉碎して岩絵の具にし、それを使用した作品を制作したいと考えています。私が日本画の画材を使用する理由の1つとして、墨を磨るように手を使い精神統一するような時間の流れを必要とする作業が多いためです。岩絵の具を製造する過程(粉碎→分級→脱水→乾燥)にもこのような作業があります。その時の自身の状態が、つくる岩絵の具の粗さや色の選択に反映されるのではないかと考え、従来の既製品の岩絵の具よりも作品の制作過程により重きを置けると考えています。実際に今年2024年10月に女子美術大学相模原キャンパスにある石の工房を利用させていただく機会があり、相模川の石を粉碎し、分級して岩絵の具をつくりました。素朴な優しい色で石の個性差によって色合いが変わり、既製品の均一な粒子の大きさよりも粒子の大きさに少し幅があることにより絵肌が魅力的な岩絵の具になりました。大学院を修了してからは初めて岩絵の具を作りましたが、大学院時代を振り返ると画材を自分でつくれる環境とご指導いただける環境が充実しており、恵まれた教育環境下で日本画を学べたと改めて感じました。

また、人や地域と交流する美術活動も大切にしたいと考えています。人との交流は日常の変化に影響し、自身の制作においても大切な要素です。そのため、今後は都内以外の地域での活動も考え、現在、静岡県で地域が利用するギャラリーでの展示を静岡県在住の短大時代の同期と企画し、来年2025年11月にグループ展を行う予定です。展示期間中は滞在して、作品の展示だけではなく、地域の方々と交流しながら美術活動を行いたいと考えています。

最後にこれまでの制作活動を支えてくださった多くの方々に感謝し、この度の助成に深く御礼申し上げます。

2023 年度 第 23 回女子美制作・研究奨励賞 達成・進捗報告書

小田中 めぐみ

作成日：2024.11.18